シゴトファイル

左官職人・経営者

木本己樹彦さん(56)

株式会社木本工業所(神奈川県藤沢市)

「左官の仕事は時代をこえて残るのがいいところ。いい仕事してるなと思ってくれたら最高ですね」と話す木本己樹彦さん=13日、神奈川県藤沢市の木本工業所、近藤理恵撮影

漆喰が腕の見せどころ 伝統的な技術を普及へ

左官とは、工具のコテを使って、建物の壁や床、天井、外壁などの土台を塗り固めたり、最後の仕上げをしたりする仕事です。左官(日本壁)の伝統的な技術は、ユネスコ(国連教育科学文化機関)の無形文化遺産に「伝統建築工匠の技」のひとつとして登録されています。

木本工業所は、神社仏閣や一般住宅、ビルの左官工事のほか、テーマパークや公園の演出に用いられる擬木(木を模した造形物)なども手がけています。

「左官とはシンプルに、塗る仕事」と説明する木本さん。何を塗るかは場所や目的によって変わります。建物の土台づくりにはモルタルやセメントを、最後の仕上げには、石灰に海藻や麻などを混ぜてつくる漆喰や珪藻土などをよく使うそうです。

漆喰や珪藻土は、加える水分を加減して硬さを調整します。「梅雨の湿気が多い時期は少なめに、真夏は一気に乾燥するので増やすなど、季節や地域の特性、職人の好みによっても変わります。配合のレシピや水加減は職人の腕の見せどころです」と話します。

木本さんは、2008年に会社の経営を父親から引き継ぎました。40年前は約25人の左官職人を抱えていたそうですが、今はゼロ。外部の職人約30人と提携して、さまざまな左官仕事に対応しています。

木本さんが特にこだわってきたのが漆喰です。「自然素材の漆喰は、調湿(空間の湿度を調整する)にすぐれてカビが生えにくい、燃えにくい、においを吸着するなどの特徴があります。最終的には土にかえるので環境にもやさしい」と言います。

「漆喰を使う人がもっと増えれば、職人も増える」と考える木本さん。世界各地の漆喰を取り寄せ、原産地にも足を運んで研究し、壁紙の上から塗ることができるオリジナル漆喰の開発も手がけました。

日本の漆喰のすばらしさを世界にも知ってほしいと、17年に米ロサンゼルスに現地法人を設立。神奈川県内の中学校や高校で左官や漆喰のことを伝え、体験してもらう取り組みも続けています。

「最近は女性の左官職人も目にするようになりました。これからも、左官を通して漆喰の可能性を広げていきたい」

(戸井田紗耶香)

シゴトの極意

①三つの目で見る

俯瞰(ふかん)する鳥の目と、魚のような広い視野を持ち、虫のように足元もよく見る

②打つ手は無限大

常に新しいことにチャレンジして次の一手を考える。失敗しても命まではとられない

③目的意識を持つ

仕事はお客さんと将来の自分のためにする

これだけは!アイテム

右から塗る材料をのせるコテ板とサイズや形が異なるコテ。一番左のコテは、ラーメン屋さんの壁に麺を表現するために作成したオリジナル。

後輩へメッセージ

人生を考え続けよう

人生は選択の連続です。とにかく自分で考えてみるくせをつけてください。選んだ選択肢が違うと感じたら、あとから軌道修正するチャンスもきっとあります。いい方向に向くように、考え続けることが大事です。

あゆみ

1965年、神奈川県生まれ

小学校時代

マンガ雑誌を友達と回し読みするのが楽しみだった

サッカーに夢中な中学、高校時代

中学、高校はサッカー部に所属。左官業を営む実家には職人が常に出入りしていた。家族だけで気兼ねなく過ごせる友達の家がうらやましかった。勉強は苦手だった

84年

木本工業所に入社

87年

先輩の道具を手入れし、材料の準備に明け暮れる日々に嫌気が差し退社。夏はライフセーバー、冬はスキー場などで働く。トライアスロンの大会に参加した

92年

地元の建設会社に入社。一念発起して建築関連の国家資格を多数取得

96年

木本工業所に再入社

2008年

木本工業所の代表取締役に就任

17年

米ロサンゼルスに現地法人「OWKIMOTO」を設立

ターニングポイント

同級生の活躍にあせり

人生が変わったのは26歳の時。「俺は大器晩成だ」と就職せずに過ごしていたものの、同級生たちの活躍にあせりを感じ、地元の建設会社に就職。働きながら、がむしゃらに勉強しました。仕事の自信もついてきた30歳の時、傾いた家業を立て直すために木本工業所へ戻り雑用係からの再スタート。以来、漆喰にはまり続けています。